

♪ 2023年度 *poco a poco* ♪

Nr. 20 2024年1月17日(水)

文責:プファイル・辰巳

## 年が明けて・・・

2024年1月を迎えて早半月。つい数日前に新年を迎えたような気でいましたが、あっという間の2週間でした。うかうかしていると、3学期が風のように過ぎ去ってしまいそうですね。

とはいえ、大地震から避難生活を余儀なくされている方々にとっては、長い長い2週間余りだったことと思います。寒さと不安と不自由さの中で過ごされていることを思うと、胸が痛みます。一日も早く復旧作業が進むことを祈るのみです。

さて、みなさんの3学期の生活は、リズムに乗ってきましたか。音楽科の授業では、6年生を送る会や卒業式の歌練習が始まっています。1年の締めくくりの大切な儀式です。送られる卒業生も送る側の在校生も、それぞれの思いを込めて歌うことを通して、みんなの心に残るような集会や式典になるといいですね。

## 音楽こぼれ話 <テレマンの教会>

フランクフルトに所縁の深い作曲家を紹介しています。第4話は前回のヒンデミットとは対照的に古い時代(バロック時代)の作曲家、ゲオルグ・フィリップ・テレマンについてです。

テレマンは後期バロック音楽を代表するドイツの作曲家です。同時代の作曲家であったヘンデルとはライプツィヒ大学時代からの友人でした。またJ.S.バッハとも友好関係にあり、バッハの次男(カール・フィリップ・エマヌエル)の名づけ親になりました。

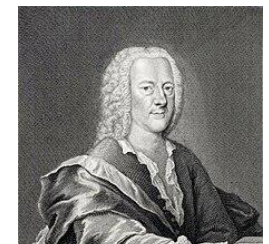
マグデブルグ生まれのテレマンは40歳以降、北ドイツのハンブルグ市の音楽監督



として活躍しましたが、それ以前の30代を過ごしたのがフランクフルトでした。1712年、フランクフルト市の音楽監督に就任したテレマンは、さらにハウプトヴァッヘにあるカリーネン教会の楽長にも就任しました。1721年にハンブルグに移住するまでの約10年間をフランクフルト市で過ごしたテレマンは、礼拝のためのカンタータを数多く作曲しただけでなく、楽団や合唱団を編成したり、コンサートを企画したりして、フランクフルト市の音楽界を活性化させました。

ハンブルグに移住後も、フランクフルト市民としての地位を手放すことのなかったテレマンは、市税を納める代わりに、ハンブルグから自分の作曲したものを、フランクフルト市に定期的に送っていたそうです。フランクフルト市は、それにより、今日でもテレマンのカンタータ作品の原本を800以上も有しており、そのコレクションの多さは他に類を見ないそうです。

テレマンは当時の作曲家としてはかなりの長生きをし、1767年86歳で亡くなる直前まで、作曲を続けていました。バイタリティに富んだ作曲家だったのですね。



## ちょっとだけ 音楽会情報

1月25日(木) アルテオーバー・ランチコンサート

13時から モーツァルトホールでの30分間コンサートと軽食付き  
チャイコフスキー「弦楽六重奏曲」

2月11日(日) 11時から アルテオーバー・大ホールにて

12日(月) 20時から フランクフルト・ミュージアム・オーケストラの演奏  
スメタナ作曲「わが祖国」全曲(モルダウを含む)

2月18日(日) 16時から アルテオーバー・モーツァルトホールにて

ファミリーコンサート  
「石のスープ」(イギリスのメルヘンと音楽)  
フランクフルト音楽大学生による演奏